

外研

日语分级读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.2 4 6

こ いずみ や く も
小泉八雲の

こ わ はなし
怖い話 2

み み ほ う い ち
耳なし芳一 /
う め づ ちゅう べ え はなし
梅津忠兵衛の話



日本NPO法人 日本語多読研究会

小泉 八云 (日) 原著

栗野 真紀子 (日) 缩写

桥爪 明子 (日) 插图

姊川 卓 (日) 插图



2008

外研

日语分级读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.2 4⑥

こ いずみ や く も こ わ はなし
小泉八雲の怖い話2

み み ほ う い ち
耳なし芳一

江苏工业学院图书馆

藏书章

日本NPO法人 日本語多読研究会 主编

小泉八雲(日) 原著

栗野真纪子(日) 缩写

柳川卓(日) 插图

外语教学与研究出版社

北京

京权图字: 01 - 2008 - 1939

© Originally Published by ASK Publishing Co., Ltd., Tokyo Japan

图书在版编目(CIP)数据

外研日语分级读库. Vol. 2. 4. ⑥ / 日本NPO法人日本語多読研究会主编. —
北京: 外语教学与研究出版社, 2008. 11
ISBN 978 - 7 - 5600 - 7956 - 1

I. 外… II. 日… III. 日语—语言读物 IV. H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 178424 号

出 版 人: 于春迟

责任编辑: 王晓静

装帧设计: 王 军

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 北京国邦印刷有限责任公司

开 本: 880 × 1230 1/32

印 张: 1.375

版 次: 2008 年 12 月第 1 版 2008 年 12 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978 - 7 - 5600 - 7956 - 1

定 价: 36.90 元 (全五册)

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 179560001

日本語を勉強しているみなさんへ

「にほんごよむよむ文庫」は、

日本語を勉強しているみなさんのための「読みもの」シリーズです。

楽しみながらたくさん読んでください。

やさしいものからたくさん読むと、知らないうちに漢字の読み方や言葉が身につきます。

読んだ話をCDでも聴いてみてください。読みながら聴いてもいいですよ。

目からも耳からもどんどん日本語を吸収しましょう！

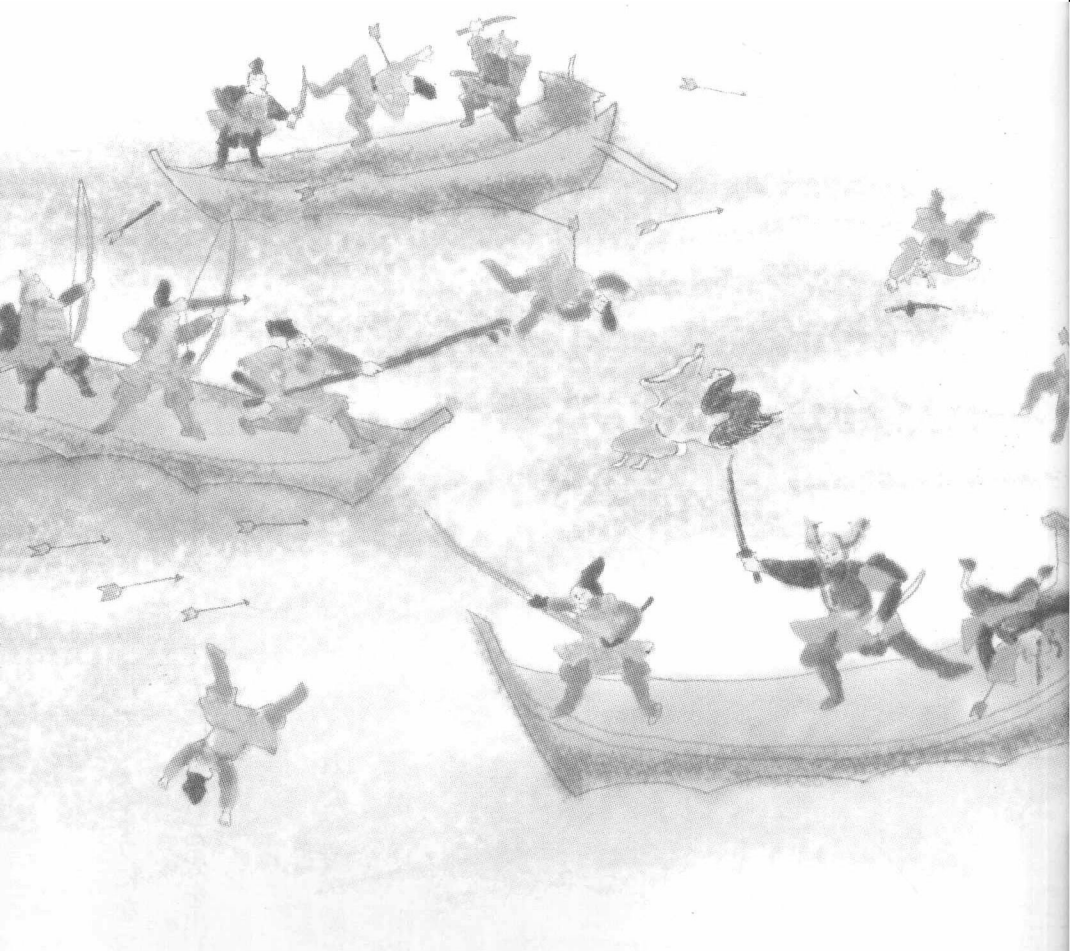
「にほんごよむよむ文庫」4つのルール

- 1 やさしいレベルから読む。
- 2 辞書を引かないで読む。
- 3 わからないところは飛ばして読む。
- 4 進まなくなったら、他の本を読む。

今から八百年以上も前のことである。

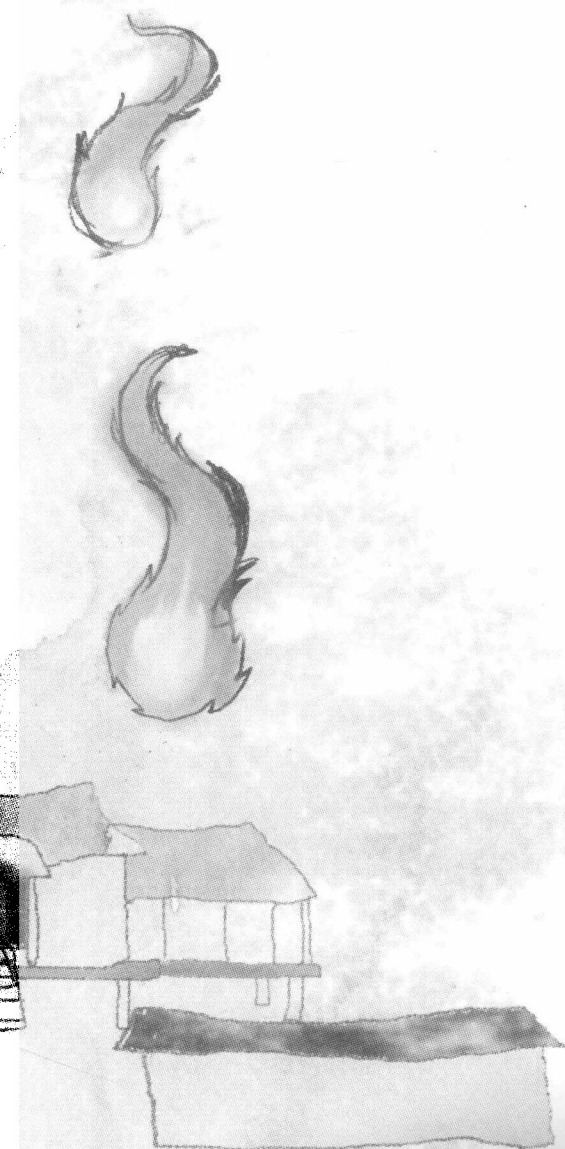
その頃、日本には、源氏と平家という二つの大きな武士の家があった。この二つの家の間で戦争が始まった。初めは平家が強かったが、だんだん源氏が強くなった。京都にいた平家は、壇ノ浦（今の山口県下関市）というところまで逃げた。最後に壇ノ浦の海の上で戦って、とうとう平家が負けた。平家の人々は、女も小さな子どもも海に飛び込んで、ほとんど死んでしまった。



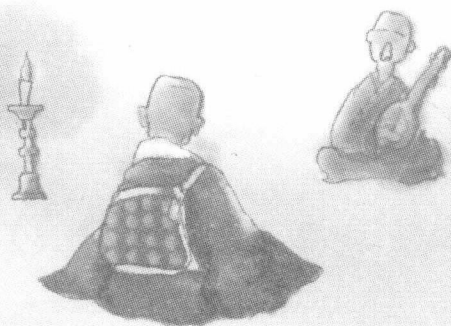


この壇ノ浦の戦いの後、死んだ平家の人々が幽霊になって、海に出てくるようになった。
幽霊は、泳いでいる人の足を海の中へ引き込んだり、夜、海の上に鬼火と呼ばれる火を出したりして、人々を驚かせた。

そこで、幽霊が出ないようにと、海の近くに阿弥陀寺という寺が建てられた。寺の隣には墓も建てられた。墓の石には、海で死んだ平家の人々の名前が書かれた。それからは、幽霊が出ることはいなくなつた。







さて、それから何百年も経った後のことである。

この壇ノ浦に、芳一という男が住んでいた。芳

一は生まれたときから目が見えなかったので、琵琶

法師になった。琵琶を弾きながら、人々にいろいろ

な話を歌って聞かせるのだ。芳一は琵琶がとても

上手で、源氏と平家の戦いの話をするのが得意だ

った。特に、壇ノ浦の激しく悲しい戦いの話をす

ると、聞いている人々は、みんな泣いた。阿弥陀寺

の住職（寺の主人）も、芳一の琵琶をすばらしい

と思っていた。よく芳一を寺に呼んで琵琶を弾かせ

た。そのうちに、住職は芳一に寺の中の一部屋を

与えた。そこで、芳一は寺に住むことになり、用事

のない晩はいつも、住職のために琵琶を弾いた。

ある夏の夜のことである。

住職は用事があつて出かけた。寺

にいるのは芳一だけだった。その日は、

とても暑かった。芳一は部屋を出て、

縁側に座つて琵琶の練習をしていた。

夜遅くなつても、住職は帰つてこな

かった。すると、だれかが裏の門から

入つてきた。その足音は、庭を通つて

芳一の前で止まった。住職ではなか

った。武士のようだった。

その武士は、「芳一！」と、大きな

声で名前を呼んだ。男の声だった。



「はい！」

芳一は驚いて答えた。そして、男に聞いた。

「どなたですか？」

「私は、この寺の近くに泊まっている者だ。私のご主人様が、おまえの琵琶を聞きたいと言っている。琵琶を持って一緒に来てくれ」

その時代は、だれでも武士の言うとおりにしなければならなかった。そこで、しかたなく芳一は琵琶を持って、男の後についていった。

しばらく歩くと、男は立ち止まった。大きな門の前に立っているようだった。芳一は、変だと思った。この町には阿弥陀寺以外に大きな門はないからだ。

男が、「門を開けろ！」と言うと、門が開く音がした。



男おとこの後あとについて、芳一ほういちは中なかに入はいって
った。広い庭ひろにわを通とおつて、また止とまった。

「だれかいるか。芳一ほういちを連つれてきたぞ！」

男おとこが言いうと、戸とを開あける音おとや女おんなの話はなし

声こえが聞きこえてきた。芳一ほういちは、案内あんないされて建たて

物ものの中なかに入はいっていった。大おおきな部屋へやに着つく

と、そこには、たくさんの人ひとがいるようだ

った。すると、女おんなが芳一ほういちに言いった。

「ご主人様しゅじんさまが、琵琶びわを弾ひいて平家へいけの話はなしを

しろと言いっています」



芳一が、

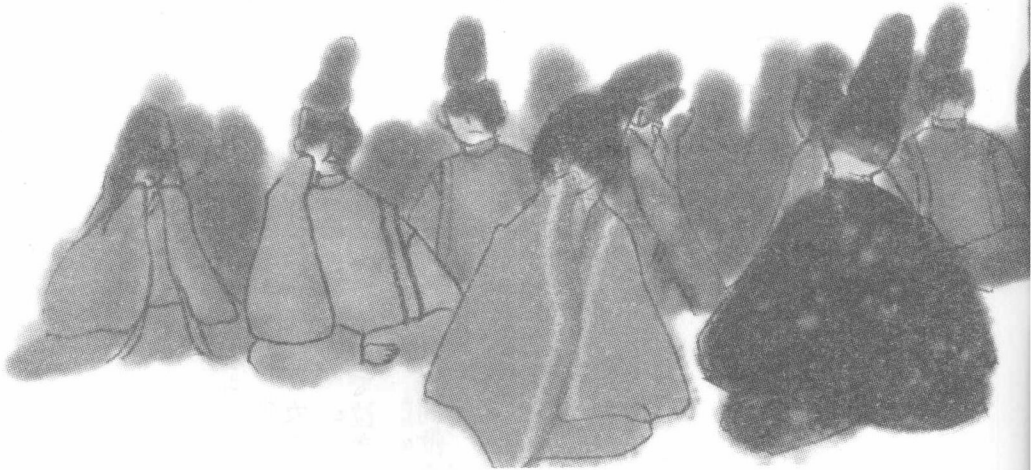
「長いので全部はできません。ご主人様は、どの部分がいいのでしょうか」

と聞くと、

「『壇ノ浦の戦い』をお願いします」

と、女は答えた。

そこで、芳一は、大きな声で壇ノ浦の悲しい戦いの話を歌い始めた。船が進む音、空を飛ぶ矢の音、人々の声や走り回る音、刀の音、人が切られて海の中に落ちる音などを、上手に琵琶で弾いた。



「すばらしい！　こんな美しい琵琶は、これまで聞いたことがない！」

「芳一の琵琶は、日本一だ！」

周りで聞いている人は、驚いて大きな声を出した。

すると、芳一は、ますます上手に琵琶を弾いて歌った。そして、とうとう最後に、女たちが小さな子どもを抱いて海に飛び込むところを歌い始めると、聞いている人々は大声で泣き始めた。人々の泣き方がとても激しいので、芳一はびっくりしてしまった。人々は長い間泣き続けた。そして、やっと静かになると、さっきの女が言った。

「すばらしい琵琶でした。ご主人様も大変よかったと言っています。明日から六日間、毎晩、琵琶を聞かせてください。明日も、同じ時間にここに来てください。それから、ご主人様がここに泊まっていることは、だれにも言っではいけませんよ」

芳一は、「ありがとうございます」とお礼を言っ、また武士の後について、寺に戻った。

芳一が寺に戻ったのは、もう、空が明るくなるころだった。住職は、もう帰っていたが、芳一が出かけていたことに気がつかなかった。

次の日から毎晩、武士は芳一を連れていった。芳一は同じ場所で琵琶を弾いて歌った。芳一はだんだん元気がなくなつて、顔色も悪くなつた。

住職は、そんな芳一を見て、

——どうしたんだろう——

と、不思議に思つた。

ある晩、住職は、芳一が寺にいないことに気がついた。朝になつて、芳一が帰つてくると、住職は芳一を呼んだ。

「芳一、どこへ行つていたんだ？ 目の見えないおまえが、一人で夜遅く出かけるのは危ない。どうして私に何も言わないで出ていったんだ？ どこへ行つていたんだ？」

「ごめんなさい！ どうしても行かなければならない用事があつたので……」

芳一はそう答えた。しかし、出かけた理由は言わなかつた。住職は、芳一が理由を言わないので驚いた。

——どうもおかしい。何かよくないことがある——

住職は芳一ほういちのことがとても心配しんぱいになった。そこで、寺男てらおとこ（寺で働いている男おとこ）たちに、

「芳一ほういちが、また、夜出よるでかけたら、どこへ行くか見てこい」と言いった。

その夜よるも、芳一ほういちは寺てらを出ていった。寺男てらおとこたちは芳一ほういちの後ろうしを歩いていった。しかし、すぐに、芳一ほういちは見えなくなつてしまった。

「変へんだなあ。芳一ほういちは目めが見えないから、速はやく歩けない。それなのに、すぐに見えなくなつてしまった。どこへ行いつてしまつたんだろう」

寺男てらおとこたちは、いろいろなところを探さがした。しかし、芳一ほういちは、どこにもいなかった。困こまつて寺てらに帰かえつてくると、寺の墓地ぼちから琵琶びわの音おとが聞こえてきた。寺男てらおとこたちがそばに行いつてみると、墓地ぼちの中に芳一ほういちが一人ひとりで座すわっていた。芳一ほういちは、琵琶びわを弾ひいて大きな声こゑで壇ノ浦だんの戦たたかいの話はなしを歌うたっていた。墓はかの上うへには火ひがいくつも見みえた。それは幽霊ゆうれいの鬼火おにびだった。